

明治大正

集金宇文

鶴岡武

49

明文治學大全止集

第四十九卷



戲曲篇第三

春陽堂版

(非賣品)

印檢者權作著



耶四孝地恩幀裝

本配回七十四第・卷九十四第・集全學文正大治明

昭和六年四月十一日印刷
昭和六年四月十五日發行

著作代表者

中村吉藏

發行者

和田利彦

印刷者

木呂子斗鬼次

發行所

春陽堂

東京市日本橋區通三丁目八

電話 日本橋 五三六四
振替東京 一六七一

整版所 日東印刷株式會社
製紙場 富士製紙株式會社
表紙布地 生田商店
口費印刷所 早川印刷所
見取印刷所 本印印刷所
印刷所 明治印刷株式會社
製本所 高崎製本所
製圖所 中田製圖所
扉印印刷所 竹田印刷所

明治大正文學全集第四十九卷 目次

中村吉藏篇

戲曲 淀屋辰五郎（三幕六場）……………三

木下杢太郎篇

柏屋傳右衛門（社會劇三幕十場）……………八五

和泉屋染物店（一幕一場）……………一三三

南蠻寺門前（樂劇一幕三景）……………一五三

吉井勇篇

狂藝人（三幕）……………一七三

俳諧亭句樂の死（一幕）……………二一〇

髑 髏 尼……………二一九

秋田 雨雀篇

國 境 の 夜（四節）……………二五七

手 投 彈……………二七三

劇喜 アスパラガス……………二八九

池田 大伍篇

茨木屋 幸齋（三幕）……………三〇七

男 達 ば や り（一幕二場）……………三一九

根 岸 の 一 夜（一幕）……………三三〇

（雨華庵軼事）

瀧口時頼……………三六

鈴木泉三郎篇

生きてゐる小平次(三幕)……………四二

美しき白痴の死(二幕)……………四六

次郎吉懺悔(三幕)……………四四

谷底(一幕)……………四七

火あぶり(一幕)……………四九

心中の始末(一幕)……………五一

著者筆蹟 吉井 勇氏

同 秋田 雨雀氏

同 池田 大伍氏

同 鈴木 泉三郎氏

中
村
吉
藏
篇

60

戯曲

淀屋辰五郎 (三幕六場)

登場人物

番頭	淀屋辰五郎
同	惣七
同	權六
同	幸右衛門
手代	清六
大阪城代家老	井上九八郎
大坂城代	土岐伊豫守
黒田藩用人	栗山頼母
幫間	喜知六
辰五郎母	吾妻太夫
辰五郎妾	お庵
惣七妻	お富
新造	お新鶴
其他、侍、役人、女郎、手代、群集等大勢	
場所	

大坂

時代

寶永二年の夏

序幕

第壹場 淀屋橋前

淀河縁に架け渡した淀屋橋の渡り口、河岸にあしらはれた楊柳が二三本、初夏の風に搖れ、漫々たる水が靜かに流れて、川向ひの中の島に、瓦屋根の長い米會所の建物、白壁の倉庫の棟の建列んだのが、傾きかゝる夕日を赤黄色に反映してその影がキラ／＼と水の上を彩つてゐる、下手寄りには白壁造りの扉を黒く塗つた、いろは庫の一つが見えてゐる。

○

ぢやら／＼と鈴の音、米俵を鞍に積んだ駄馬の行列が続いて橋を此方へ渡つて来る、馬子はくはへ烟管で掛合ひ話をしながら綱を引いてゐる。

甲の馬子 今な、米屋はんの話してはるのを聞くと今日の相場は初頭^{ひだり}が百貳拾目、はねが百目やさうな、淀屋はんの元仕入は七拾目か、高々八拾目には附くまいといふから、莫大の儲かり様やがな、何んでも西國三十三ヶ國の

諸大名に、淀屋から金を借りて居らん者は一人もないといふ事ぢや、町人も斯うなると御大名より豪いもんやないか？

乙の馬方 フム、今に淀屋はんは公方様よりも豪くならはるといふ評判やがな、さうなつたら江戸が寂びれて、この大阪が天下を取る番になるやらう。

甲の馬方 イヤ、今でも大阪は天下の御臺所やないか？

淀屋はんは、その御臺所の財布の紐を握つてゐるのや、辰五郎親方は年こそ若いが、どえらい惴護者で米の相場が立つ事になつたのも皆あの親方の才覺やいふから、末恐ろしい人に違ひないがな。

丙の馬方 阿呆らしい、人さまの懷勘定してる隙に早う家へ戻つて、濁酒に酔ふ才覺でもした方が餘程ましや、全盛の淀屋の寶物庫から、この頃黄金の鶏が宵鳴する聲が聞えるといふ、けつたいたな噂も立つてるさかい、もう永持するか何うか判らんがな。

甲の馬方 エ、黄金の鶏が宵鳴する？ それア一體何うした事やろ？ 聞かせて貰ひたいもんやな。

丙の馬方 聞かせるも聞かせんも、黄金の鶏は淀屋の名代の重寶やないか？ それが宵鳴し出したといふのは、凶い兆に定つてゐるがな、何をいうてもまだ年若の辰五郎親方、この頃は惡所通ひが嵩じて、遊びほうけてゐるとい

ふ事やしな、それ者もの久しからずとか、何んとか云ふ文句もあるやないか？

甲の馬方 フム、さう聞くとチツト許り心當りがある、何

んでも此頃は、江戸で金銀が手詰りになつて、困つた揚句が、京、大阪の町人へ手を入れるとか、入れぬとか、眞實らしく云ふ者もあるさかい……でもまア見て見い、いろは庫四十七、屋の棟を揃へて列んだ處はえらいもんやないか？ あれが取り崩されるたアほんまに夢のやうな談や、まさかそんな事もあるまいけれど、まアよう見て置かうか。

乙の馬方 ウム、私もまアよう談の種に見て置かうか。

丙の馬方 ハ、汝等も随分周章者やな、だが何事も運賦天賦といふから、淀屋はんが馬方になつて、己達のやうな馬方が、明日の日、淀屋はんにならんとも限つたもんやない、金は天下の廻り物と思ふたら、腹も立たんかい。

甲の馬方 己等はさういふ夢も見た事アないが、大阪の城で、豐臣様ア打潰され、今度は又大阪の町人まで打潰された日にや堪つたもんやないな。

乙の馬方 然うや、今のやうな事は鶴龜々々……。

甲の馬方 眞實に鶴龜々々や。

丙の馬方 ハ、躰の皮が搔れらな、汝等の佛性にも

……。
（後から、米商人の群がガヤ／＼聲高に罵り喚きながら、橋を渡つて来る。）

米商人甲（馬方等に眼をつけて） オイ、まだ此所邊に愚

圖ッいてゐるんやな、道草喰はんで、早う店までやつと

くれんかいな、急ぐのやさかい、頼んだぜ。

馬方 ハイ／＼……ドウドウ……。 （と馬の尻を打ちながら追うて行く）

米商人乙（追ひすがつて） お前ははんは、後場を買うて大

分儲けてきやはつたな、初手の立會たア十匁目方安かつ

たもんな。

米商人丙 肥後米が、どつと一時に仰山入つて來たんで、

相場が狂ひ出したんや、私等はあほらしい目に逢うた。

米商人甲 その代り、昨日、廿目方高く買ひましたぞかい、

些とやそつと儲かつてもあきまへんがな。

米商人乙 私は昨日も高い物を仕入ましたんや、斯うまん

が悪うてはかなひまへんがな。

米商人丙 何う轉んでも帳元は儲かりますな、淀屋はんも

これぢや金が殖えて仕様がたまへんやろ、今に、も一つ

いろは庫でも建てはりますやろ。

米商人甲 儲つて／＼、掃き出すにも場所がないさかい、

辰五郎はんがこの頃精出して使ひ出しやはつたといふ事

やが、世の中は調寶に出來たもんやな。

米商人乙 ほんなら矢張り、ア、いふ噂は眞實かいな、道

理で、この頃、會所に辰五郎はんの顔がサツバリ見えま

へんな。

米商人丙 ア、左様か、でも淀屋はん程の身代なら、使う

ても／＼なか／＼使ひ切れまへんやろ、新小判が出て米

の價は滅法界上る、世間が不景氣やさかい、ある人はド

ン／＼使やはるがえゝのや。

米商人甲 オット、新小判の悪口いふと、どえらい目に逢

ふぜ。

米商人丙 ホイ、この口めがツイすべつた、云はん昔、聞

かん昔、隱密の耳にでも入つたら搦替のない笠の臺が飛

ぶ所やつた、あゝ桑原々々。

（と小足早に駈出す、後からも暫時、不安な顔や得意

の顔の米商人がひそ／＼話したり、笑つたりして渡つ

て来る、やがてそれが途絶えると一方の河岸へ、米俵

を積んだ一艘の荷足船が着く。）

（此時、淀屋の大番頭惣七、年配四十歳あまり、前垂

れ掛けの實體さうな男子、一人の丁稚に帳簿を持たせ

て、橋の上を渡つて来る、船の方に目をつけて。）

惣七 大きに御苦勞、もう時刻が過ぎたによつて、その米

は又明日の朝の事にして、その倉庫へ運んどいて貰は

う。

船人足　へい、その倉庫だすな……さア揚げたり揚げたり、ヨイシヨコラ、ドッコイシヨ。

一同　ヨイコラ、ヨイトマカ、ヨイコラ、ヨイトマカ……。

（船から米俵を岸へ荷揚げする、それを二三人の足が擔いで、セツ／＼と倉庫へ持運ぶ。）

惣七　ア、もう蝙蝠が飛んで居る、何時の間にか日はとつぷり暮れて仕舞うたな、今日の立寄も先づ無事に済んだといふものぢやが、それにしても、辰五郎様は何うなされた事やら、新町から直ぐに男山八幡宮へ御参詣といふ云傳ではあつたがそのまゝ八幡へお泊込みなさるのかいな、何にしる困つたもんやな。（と橋の上へ立戻つて、腕組しながら川上の方を眺めてゐる。）

丁稚　大番頭はん、私はもう此處に用事はおまへんな、この帳面を何時の帳場へ仕舞ふといひたらそれでよろしおますかいた。

惣七　ア、もうよろしい、先へ歸つといてくれ。

丁稚　へい、ほんならお先へ。（叩頭して駈入る）

船人足　親方はん、メて二十俵相違なく倉庫へ積み込みましてございます。

惣七　ア、左様か、皆、御苦勞々々々、ぢやア又明日な。船人足　ではこれで御免蒙ります。（一同ドヤ／＼ト入つ

て行く）

（惣七は相不變川上を氣にしてゐる、楊柳の影を蝙蝠がしきりに飛び交うてゐる、心付いたやうに、倉庫へ近寄り、腰へぶらさげた鍵を取上げて扉を締めにかゝる。惣七の女房お新、色白の小綺麗な中年増、淀屋の「堂」の定紋の附いた小丸提灯をぶら／＼手にさげて出て来る。）

お新　惣七はん……惣七はん……オ、そこに居てだしたか、私は大變な事を聞いて先刻から氣になつてどうならんさかい、汝はんをさがしに來ましたのや。

惣七　何に、大變な事……ど何うしたといふのや？

お新　まアそのやうな大きな聲をして、他人が聞いたらいけまへんがな……（と耳打ちする）

惣七　（顔色を變へ）　何に……辰五郎様か、大名行列……

あの、大名行列の眞似をなされたといふか？

お新　今先、八幡の方から戻つた人が、さういふ事をいうて居ますのや……若しやお氣が狂うたのではないかと、私や心配／＼なりまへんのや。

惣七　（嘆息）　若しもそれが眞實の事なら、淀屋の家の運もう末ぢや……困つた事になつたもんやな。

お新　黄金の鶏が宵鳴するといふ噂が立つし、眞に碓な事は一つもあらへんがな、御隠居様もこの頃一時にお年齢

をお取りなされたやうで、お面の寝れが眼に附くやおまへんか、それに旦那様のなさる事が、何うも正氣とは思はれまへんがな?

惣七 あの側發なお方が、何うしてさういふ僭上な眞似をなされたのやら……これはきつと魔がさしたといふのやらう。

お新 眞實にお年が若うても、側發や／＼云うて聞えたお方が、一體何うした事だすやろ、これといふのもあの惡番頭の權六や、幸右衛門めが、自分の腹を肥したい許りに、辰五郎様を嗾かして惡所通ひの味を覺えさせたのが、調子の狂ひ出すそも／＼ぢやアおまへんかいな、あのやうな惡人等を早う何うかしてやる事は出来んもんかいな?

惣七 何うしやうにも彼等は、辰五郎様の體へダニのやうに喰ひ込んでゐやがるので、何を云うても奉公人の私の手では、暇を出す譯にもゆかんしな……併し町人の分際で大名行列までやつたとなりやア、もうお倉へ火が附いたも同前、まさかこの儘捨てゝも置かれなやないか。

お新 噂が噂だけならまアよろしおますが、若しも眞事やつたら、汝はんもコリヤ何んとか一思案せにや置けますまいがな。

惣七 ウム、もう黒圖々々しては居られぬ……御隠居様へ

何もかも打ち明けて、淀屋のお家の潰れぬやうに、今の中、支へ柱するのが私の勤めぢや。

お新 眞に早う安心の出来るやうにしておくなはれ、頼みまつせ。

(向ふより、忍びの提灯で編笠を冠った武家、仲間に包物を持たせて來かゝる。惣七夫婦は後方へ退る。)

侍 ア……それなるは淀屋の惣七とのではござらぬか。(と聲をかける)

惣七 さう仰やるのは何方様で?

栗山 拙者で御座る、黒田藩の栗山頼母で御座る……。 (と編笠を脱いで)

惣七 (丁寧に挨拶) ヤ、コレハ……何方様かと存じました、何方へかお越しで御座りまするか?

栗山 これなる御婦人は?

惣七 家内めに御座ります……お新、黒田藩の御用人様ぢや、御挨拶を……。

お新 お初にお目にかゝります……宿が毎度御眞様になりまして……。

栗山 イヤ、此方こそ容易ならぬお世話を掛けます……實は淀屋へ參らうと思つて出かけました處、辰五郎氏には相不變御健勝で御座らうな。

惣七 ヘイ……難有う御座ります……只今一寸と他へ出浮

いて居りますが、もう追附戻つて来る筈で御座りますゆゑ、何卒……私が御案内いたしませう。

栗山 左様でござるか……では暫らく御邪魔を。

惣七 さア何卒御越しなされませ……お新、汝來て皆を差圖してお茶の支度をな。

栗山 イヤ、もう決してお構ひ下さるな……淀屋へは何時
も御面倒をかける許りでな。

お新 サア……何卒お越しなされませ……アレ門もまた明
いて居ります。

惣七 フム、まだ締めずにあるな……サア……斯うお越し
なされませ。

(惣七夫婦は栗山主従を案内して入つて行く。)

(編笠で面を覆した二人の武士、何處からともなく出
て来る。)

甲の武士 黒田藩の御用人が、金でも借りに出かけました
かな？

乙の武士 イヤ、もう借金の方は大分嵩んである様子、そ
れでべんちやらでも云ひに行くのと見えます。

甲の武士 斯うなつては町人の頭が高くなる許り、九州の
大大名の藩士たる身分で、あのさまでは他が思ひやられ
ます。

乙の武士 それにしても、辰五郎が、大名行列で八幡へ乗

込んだといふ噂が眞實なら、それを料にお仕置がなりま
せうな。

甲の武士 八幡三百石は、淀屋が領分ゆゑお叱りは兎も角、
己が領分内の事ならまだそれだけではな。

(川上の方に絃歌の聲が上る。)

乙の武士 あれは何事で御座らう。(と橋の方へ行く)

甲の武士 たしか川上からの様ぢやが……。

(と此れも橋上に行く。)

乙の武士 涼み船もまだ早からうに、稀有の事で御座る。

お新 (勿々と出て来る) まア、あゝ云付て置いたら一安
心、それにしても旦那様はまだかいな……ア一月が出
た。

(二人の武士は、人聲に驚いて姿を隠す。)

お新 誰だらう……けつたいな人やな？

(絃歌の聲が近づく……投げ節が聞える。)

更けて砧の音よりきけば

月に落ちくる我が涙

……

あまの焚く火かしはやのけむり

人のたちあのしほとなる

……

わたりくらべて世の中見れば

阿波の鳴戸に波もなし

お新 マア陽氣な事やな（川上を眺めて）船が三艘……アレ／＼一艘は中の島の方へ附けて、後は此方へ来る、若しや家の旦那はんのやないか知らん。

（その中二艘の船が、河岸へ着いて、幫間末社を先に立て、番頭權六、幸右衛門が酔つた聲で喚きながら上がつて来る。）

幫間喜知六 さア／＼皆はん、殿様のお出迎々々々、今に淀屋橋の上をお通りやさかい、上下座してゐたはれや、善えかな。

妓 此所は八幡たア違ひまつせ、さういふ眞似をして騒いでも大事をまへんかいな。

權六 然うや／＼、大阪のまん中へ戻つたんやよつて此たア靜かにせんと、外聞があるかな。

（と皆の騒ぐのを制して、河岸へ上つて来る。）

お新 まア、權六が大将面して、えらい事ぢや……惣七はんに然う云告げてやろ。

（と小足早に走りかへる。）

幸右衛門 （蹣跚しながら）吾妻太夫はんは、これから、親指と淀屋へお立寄りや、善え序でやさかい、皆も一寸お庭口まで入つて見たら善いかな。

妓 私等も黄金の鶏を拜見させて貰ひたうをますな。

やり手 是非さうさせて貰らひたうおますな、目のお正月が出来ますさかいに。

權六 黄金の鶏でも、ビードロの間でも何んでも、皆好きなものを見せてやるがな、淀屋の御座敷は、百萬石のお大名でも、敵はん程、立派なもんやさかい、見ぬ先に皆眼を廻はさん様に、用心してけつかれ。

妓 用心してけつかるさかい、見せるいうて嘔吐かんやうにしてけつかれ。

幫間喜知六 けつかつてけつかるさかい、けつかつて、けつかれやい、ハ、ハ、ハ。

（一同笑ふ。）

（橋向ふから。）

下に／＼……下に／＼！

（の警蹕の聲、槍、挟み箱の行列が渡つて来る、一同、橋の兩側に出迎へる。）

下に／＼、下に／＼……。

（酔つてよろめく足元怪しく、供頭が橋を渡つた頃。）

オーイ止めるとよ……旦那はんが止めてくれとよ……。（の聲が後から、後から傳はつて、行列は見る間にくづれる、橋の上をまだ年若の淀屋辰五郎が、紫の紋付を着て、扇子で口を掩ひ、華奢な姿の吾妻に手を引か

れて、謠曲謠ひながら渡つて来る。）

辰五郎 へあやしや、通ひ路の、すゑ白雪の薄氷り、深田に馬をかけ落し、引けども上らず打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ、こは何んとならん身の果……何アに、淀屋橋はまだ淀屋の領分の中ゆゑ、駕籠で渡らうが馬で越さうが、私の勝手ぢやが、吾妻が達つて止めて欲しいといふので、元の町人になつて、徒歩と來たのぢや、皆ももう窮屈なものをぬいで、やがて漂ろがうぞ。

權六 一同、淀屋の御殿、拜見の儀を願ひ出て居りまするが、如何計らひましたらうございませうか？

辰五郎 ウム、見たいとあれば、見せてやらう、今の中に置いて置くも、一生の語り草にならう、皆寄せてやつたら善いわい。

幸右衛門 愈々お許しが出ましたぞ、皆、御禮を云ひなはれや。

吾妻 イヤ、それも、一寸と待つて下さんせ、今日は是非とも私を御邸へ連れて寄るとの事でござんすが、それさへ私は氣がかりで、何うしたものやらと思案半ば……堅いが御掟の御町家へ、斯うして大勢の者が一時に押寄せては、親御様の手前もあるし御奉公人衆への示しにもなりませんゆゑ、皆も音に聞いた御屋敷、さぞ拜見はした

からうが、今夜だけはまア止めて下さんせ、吾妻が願ひてござんす。

權六 (頭を掻いて) コレはしたり太夫さま……イヤ吾妻さまのお堅いのにも困りもの、今からもう、御寮人様並のお心づかひをなされるのでござりますか？ それでは折角喜んで居た皆が泣きませう。

吾妻 否々、私が御寮人様になられやうがなられまいが、旦那様の爲め御家の爲めぢやと思ふ事は云ひまする、皆も氣の毒ぢやが、善う聞き分けて下さんせえなア。

一同 ハイ／＼……へエ／＼御尤で……。

(と不精無性な返事。)

吾妻 旦那さま……イヤ鯉さま、さし出た様ぢやが、吾妻の願ひを聞いて下さんせ、お威光にかゝる事でもござんすまい。

辰五郎 ウム……でも汝^{なま}だけは寄てくれるであらうな、皆の事は汝の心任せとせうが、汝の體^{からだ}だけは私の心任かせにして貰ひたいもんぢやな。

吾妻 一つ叶へて下されば、二つ我儘も申せますまい、よござんす、私は思ひ切つて御寄り申しませう。

辰五郎 (莞爾) 然うか、それならよし／＼、皆は又船へ乗つて、川傳ひに新町へ歸つて呉れ、船縁滑つて水喰はんやうに用心しや、吾妻は私が預かつた、後から駕籠で

送らせやう。

封間喜知六　へえ、心得ましてござりやす。

吾妻　まア、此所の橋の上は涼しい風が吹く事わいな……

川から陸を見る景色と、陸から川を見る景色とは、又見た眼が違つて面白いものでござんすな、南の岸も北の岸も、づらりと家々の燈火がつゞいて、大阪の町の繁昌が、鏡のやうに水の上へ映つて居ります、まア御覧じませいなア。

辰五郎　ウム風もよし、月もよし、今宵の此橋の上の眺望は又格別ぢや、燈火の影つゞいたのも、黄金の花が咲いたと見える……オ、さう云へば何處かで黄金の唸る響きも聞える……私が耳には、アレ川底からも、虚空から小判の鳴る響きがして来る様ぢや。

(と耳を濟まして凝立する)

封間喜知六　へ、その黄金の響きは、淀屋様の御邸内からでございませう、皆はん、黄金の鶏の宵鳴とはこの事だつしやろな。

辰五郎 (恍惚して)　アレ見ろ、見ろ……淀の川瀬に月が碎けて、水に黄金が浮いて流れる、浮いて黄金が流れてゆく、淀屋の庫の黄金もやがて碎けて、散つて流れて行かうぞ……流れるものは止められぬ……併しこの後、百年経つとも、二百年経つとも、イヤ未來永劫、この淀屋

橋の上に立つ人の耳に、大阪の町の黄金の唸る響は絶えるな、それさへ絶えねば、この辰五郎は本望ぢや。

吾妻　又してもそのやうな、心細い事を云うて下さんすな、私は氣がかりでなりません。

辰五郎　ハ、些とも心細い事を云うては居らぬのぢや、この大阪の末代までの繁昌を祈つて居るのではないか……オ、然うぢや、この淀屋橋も木では朽ちる、いつそ黄金の橋に架けかへようか？

吾妻　まだ醉が醒めませんかいな？　黄金の橋を架けて何うしませうぞいな？

辰五郎　家に貯藏の小判小粒を鑄潰して、黄金の橋に架けかへたら萬代までも朽ちる氣遣ひはあるまい……あの儘、役人輩の腹を肥やさせるのは馬鹿の天邊、いつそ明日からでも取りかゝらせようか？

吾妻　もう、そのやうなたわいもない事云うて下さんすな、皆なが呆れて眼を見合せて居りますわいな。

辰五郎 (空虚な笑)　ハ、皆が馬鹿か、私が阿呆か、コリヤ今宵のお月様にも分かるまい。

權六 (薄氣味惡る氣に)　旦那様、徐々、お歸りなされては……。

幸右衛門　御隠居様もお待兼でござりませう。

辰五郎 (嘲るやうに)　ハ、家に近いと殊勝な口も利